

別記様式第7号

公益信託ぎふNPOはつらつファンド
実績報告書(事業助成用)

平成19年4月27日

公益信託ぎふNPOはつらつファンド受託者
三菱UFJ信託銀行株式会社 あて

住 所:〒 501-2605

(団体)名: 特定非営利法人
武芸川福祉サービスセンター愛

代表者名: 杉山 ミサ子

公益信託ぎふNPOはつらつファンドから平成18年度(前期・後期)の事業助成を受けた事業が完了しましたので、下記のとおり関係書類を添えて報告します。

記

1. 事業名

「はつらつ企画」と「配食サービス」

2. 助成の種類 該当するものに を付けてください。

法人設立前事業助成	立ち上げ時期事業助成	展開期事業助成	人材育成事業助成
-----------	------------	---------	----------

3. 助成金額

既交付金額	1,000千円
実績額	1,000千円
差し引き額	0千円

4. 事業実施期間

平成18年4月1日 ~ 平成19年 3月 31日 (1年 か月間)

5 . 実施した事業の実績・成果

(1) 具体的な活動状況(実施日時、場所〔住所〕、対象者、参加者等)

<はつらつ企画>

温泉はつらつ旅企画

買い物はつらつお楽しみ企画

はつらつ交流企画

4月18日	谷汲温泉と織部の里	洞地区老人クラブ	参加者8人
5月15日	上之保温泉と武儀町道の駅	桶森地区老人クラブ	参加者8人
5月23日	谷汲温泉と織部の里	八幡地区老人クラブ	参加者8人
9月12日	上之保温泉と武儀長道の駅	桶森地区老人クラブ	参加者8人
9月19日	薬膳食視察研修	武芸川地区高齢者	参加者8人
11月7日	せせらぎ街道	高野地区老人クラブ	参加者8人
11月29日	徳山ダム見学	跡部地区老人クラブ	参加者8人
1月14日	武芸川温泉と武芸川めぐり	関市寡婦会	参加者24人
1月19日	大和温泉やすらぎ館	高野地区老人クラブ	参加者7人
3月15日	美並での親睦会	武芸川母子寡婦会	参加者16人
3月30日	武芸川温泉と武芸川めぐり	関市農業婦人クラブ	参加者15人

高齢者対象講座開催

6月13日	七宝焼き教室	フラットヒル	要支援対象者他8人
11月1日	七宝焼き教室	フラットヒル	要支援対象者他8人
11月10日	七宝焼き教室	フラットヒル	要支援対象者他10人
11月11日	押し花教室	フラットヒル	要支援対象者他10人
11月22日	七宝焼き教室	フラットヒル	要支援対象者他13人
12月14日	薬膳おせち料理教室	武芸川老人福祉センター	参加者20人
1月18日	七宝焼き教室	フラットヒル	要支援対象者他13人
1月22日	七宝焼き教室	フラットヒル	要支援対象者他8人
2月15日	七宝焼き教室	フラットヒル	要支援対象者他13人
2月20日	低栄養防止料理教室	武芸川老人福祉センター	参加者27人

<配食サービス>

4月1日から8月31日まで

上記の期間中毎日、配食サービスを実施。

地元で育てた野菜を中心とした、昔懐かしい和食料理が中心のメニュー。

手作りの味・おふくろの味を大切に献立であった。

利用者である高齢者の皆さんからも、「美味しい」と、喜ばれた。

しかし、500円の昼食で、一日20食にならない注文数では、維持することさえ困難であった。光熱費・家賃・食材費は、人件費をボランティアにしても支払える能力はなかったのは、非常に残念であった。

(2) 活動の成果（開催行事等の参加規模、目的の達成度、効果等）

引きこもりがちなお年寄りに対して、いかにはつつとした暮らしを提供できるかどうか、介護予防のためにも必要不可欠であると考えられる。

当はつつ企画では、買い物を楽しみ、温泉で体を休めたり、交流会に参加する事で、社会性の保持・健康維持に心がける。

また、配食サービスでは、家庭での自立支援につながると思う。つまり、如何に自立した生活ができるかが課題である。

<期待される成果>

ひきこもりの解消

自立した生活

楽しみのある元気ではつつとした生活

毎月行ってきた車での小旅行は、どの地区のお年寄りにも大変喜ばれた。

「温泉はつつ旅企画」では、まず温泉で体を休め、続いて「買い物はつつお楽しみ企画」では、道の駅や物産館で買い物を楽しみ、「はつつ交流企画」では、

御食事をとりながら、おしゃべりに花が咲いた。

時には、徳山ダムを見学しての研修会も、その規模の大きさに感心して見入ってしまった。買い物や研修では刻々と変わる社会状況に触れる事ができたと思う。

今では、顔を合わせる度に、「また連れて行ってくんさい」と言われる。

交流する機会のなかった近所同士のお年寄りが、互いに話すきっかけづくりができた事も、ひきこもりの解消につながったのではなからうか。つまり、文字通り、温泉での裸の付き合いができ、食事をしながらの団欒のひとときが、親近感を急に増したと考えられる。一回につき、8人ずつを対象として主に、同じ地域の高齢者を対象者とした。しかし、人気が高い企画であったので、地域を問わず、広範囲でマイクロバスを借りての「はつつ企画」も実施した。

出かけられることが、はつつと暮らす一つのきっかけになることを実感した企画であった。

七宝焼きや押し花教室も手先を使うことと、工夫することによる頭の体操で、リハビリに一役かったようである。いろいろ実施するよりも同じ課題で何度も取り組んだ方が、上手くなるし、上手くなれば楽しみにつながり、リハビリ効果もあがるということがわかった。

また、高齢者を抱える家庭の嫁さん対象行事として、高齢者のための「栄養料理教室」を開催し、薬膳や低栄養予防料理の講習会も人気が高かった。

(3) 今後の課題

配食サービスは、家賃が支払えないという経済的な理由から、9月にはやめざるを得なかったのは、残念であった。家庭での自立支援につながるようにと昼食を作り続けてきたが、作る社員も高齢ながら、昔ながらの献立に腕をふるって生きがいを感じていたようであった。

メニューも自分たちの畑で採れた新鮮野菜を工夫した、和食が中心の美味しい昼食であったと社員全員自画自賛している程である。

社員が生きがいを感じてのサービス事業であった。

今後は、もっと安易にできる配食サービス方法を模索中である。

はつつ企画は、今後も実費負担で実施していく。小人数のグループで申し込めば連れて行ってもらえるんだということが、浸透しているので、要望に応えながら、今後もはつつと事業を展開していく予定である。